

◇言語と非言語による表現

次は、ろう学校幼稚部3年生の、個別指導のときの教師との会話である。下線は、手話＋口話、波下線は、指文字＋口話。

絵日記を見ながら、クリスマスについての会話をしている。

A男 ツリー、ツリー 飾った。これ。

T ちょっと 見て いい？

A男 待って。(ツリーの靴下を指して) これ これ 見て。

T あら、何？

A男 お兄ちゃん、お兄ちゃん 作った。

T これは、A男の 靴？

A男 これ これ お城 ほしい。サンタ おじいちゃん ひげ 大きい。

T 大きいって何？

A男 A男 作る 無理。お兄ちゃん 作った。A男の。

T あー、A男 作れない から「お兄ちゃん 作って」ってお願いしたの？

A男 うん、A男の。

T お兄ちゃん 作った？無理？どっちだった？

A男 お兄ちゃん、これ これ これ 作る 終わった。これ 作る 終わった。お兄ちゃん 疲れたね。

「お兄ちゃん」は一般名詞であるが、ここでは、特定の人物を指している。特定の事物を指すのに、概念化した表現が使われているのだ。これに対して、

「A男 ツリー、ツリー 飾った。これ。」における「ツリー」は、特定の事物なのか、それとも一般的な事物なのか。

絵日記に書かれたのは、A男顔兄ちゃんに作ってもらったツリーであり、その意味では、特定の事物である。しかし、A男の頭の中には、お兄ちゃんに作ってもらった自分のツリーだけでなく、学校や街で見かけるツリー、絵本で見たツリー、友達が作ったツリーなど、さまざまなツリーのイメージ——クリスマスの行事の一部としてのツリー——があると見なければならない。概念化した表現を使うことによって、特定の事物だけでなく、より一般化した事物としてのツリーについて、言及できるのである。

「A男 A男 作る 無理。お兄ちゃん 作った。A男の。」において、「作る」が2回でてくる。最初は「A男 作る 無理」で、次は、「お兄ちゃん 作った」である。最初の「作る」は、実際には作っていない（作れない）ことを言うための表現であり、次の「作る」は、お兄ちゃんが、実際に作ったことを表現している。「作る」という概念的な表現によって、実際に起きた事物も起きなかった事物も、両方とも、表現することが可能になる。

A男 お兄ちゃん、これ これ これ 作る 終わった。これ 作る 終わった。
の「これ これ これ ……これ」は、絵日記に書かれた靴やお城などに対する指さしであり、特定の事物（絵日記に書かれたものであるが、絵日記の絵は、A男の特定の経験を描いたものであるから、眼前にある特定の事物に相当する）を直接的に指して示す表現である。これは、固有名詞による表現よりも、もっと直接的な表現である。（固有名詞は、特定の事物をさすが、その特定の事物が異なる場面で繰り返し登場してくるとき、その全てを一つの固有名詞で表現できる。それに対して、直示の場合は、1回限りである。）

「個別の事物を概念的に表現する」というこの言語の特質は、言語（行為）というものが、他人とのコミュニケーションの中で形成されるという意味では、社会的集団的な性格をもっているが、そのコミュニケーションやコミュニケーションの基盤となる生活体験は個別的な体験である。その結果、「働く」という言葉を聞いたとき、会社員家庭の子どもは、父親が毎朝出勤して給料を稼ぐことをイメージし、自営業家庭の子どもは、両親と一緒に家の中で仕事をしており、ときには、子どもも手伝わされる、というイメージを持つかもしれない。同じ言葉でも、その言葉によって喚起されるイメージは、ずいぶんと、ちがう。ちがうにもかかわらず、